

まにては頓て路頭に立申べしと存候ところに、いまだ天道に捨られずして、かやうの事出来たる上はためらひなくそのかたへ御こし有てたび候へ、わらはが事は、少も御心に懸られまじ存る旨候へば倒死ぬるやふにも候まじ、此ところを失れば、後に悔てもかひ有まじ、かへすべしこのはかりごと、とのふやふにといさめけるが、其夜ひそかにのがれ出て、本の青樓に行て此由を云、もとの如く身を賣、その趣を文に認め、その價を旅粧の料にこしければ、此上はとて、丹波へ往て養はれ、一年あまりも居けり、明けの年に及て、婚禮もすべきになりぬれば、さすがこゝろよからざりしにや、且は養母のいたましくやすからぬよしにて、暇こひて浪花にかへりぬ、人がらもいやしからず、常の行跡もそゞろならざるよしにて、皆人おしみあへりしとぞ、かくて舊友ともうちよりて、父にこひけるは、わかげにてそゞろなる事有べけれども、本の人からはまめやかにあれば、ゆるしやられよと云けるに、元より外に子はなし、戀しくおもふをりからなれば、此たびはやすくうけてよびかへし、殊によるこびあへりければ、をりをえて友人ども、さきに妻の心をつくし、こたび身をうりて、夫をしたてたる事ども語出て、又妻としたらば、よかりなんと云に、父も其誠なる志を感じて、ゆるしければ、青樓に通じて、其よしを云、再請出すべき代などの事談じけるに、主人云けるは、此子は始より人がら殊にすぐれて、外の者のさほうを正しくする爲に、前にもおしみながら進しき、此たび參候ても、取あつかひよく、をのづから家も繁昌して悦しゆへ、縁につけつかはし可申と存候ところの間、代金などの沙汰にはなく候とて、さまゞにはなむけてこしけるとぞ、女の嫉妬なるは、古今の情なるに、身を捨て夫をたてんとしたるこゝろ、誠に淺からずこそ、

〔續近世叢語七賢媛〕寡婦理慧、江都杵築邸山本安兵衛妻也、嫁未數年、喪夫無子、養他姓爲後放蕩亡命、山本氏亡、姑謂理慧曰、家之不淑、一至于此、我將歸鄉里、以依親舊、汝也妙齡、良圖再醮、理慧聞之愁然